

図5：対象aと欲動の主体

#5.1 予測との誤差が大きい体験  
(= 言語化されていない体験)  
(= 経験に昇華されていない体験)  
(= 「内的体験」)  
(= 「トラウマ」)  
(= 「〈物〉」) は、  
その体験自体に中毒性があるため、  
脳において「反復」される  
(= 「反復強迫」)。

\*E  
(図4)

\*F  
(図4)

#5.6  
経験に昇華されていない体験は、  
ランダムで無秩序なものではなく、  
独自の「内包」を持つ。

#5.7  
シニフィアンの体系に参入する際に、  
経験に昇華されていない体験も  
同時に発生することになる  
(= 「原抑圧」)  
(= 「性関係の排除」)  
(= 「一般化排除」)  
(= 「疎外」)  
(= 「エディプス第一の時」)  
(= 「前エディプス期」)。

#5.9  
対象aが意識に現れること (= 「対象aの顕現」) は、  
「自身が採用しているシニフィアンの体系では  
体験を説明しきれない」ことを  
証明してしまうため、  
その体験を統御できない「不安」と、  
その不安を解消するための「防衛機制」を呼び起こす。

#5.10  
体験が経験へと昇華されていない状態は、  
「世界と体験との間に『葛藤』がある状態」  
だと表現できる。

\*G  
(図4)

#5.2 予測との誤差が大きい体験を  
予測できるようにしようとする機制を  
「欲動」と呼ぶ。

#5.4 トラウマ的体験は、  
「享樂」をもたらす。

#5.5 予測誤差を体験したとき、  
概念に収まりきらない  
「存在」を人は感じる。

#5.8 原抑圧により生じる、  
独自の内包を持った反復強迫する体験が、  
「対象a」 (= 「〈物〉の断片」) である。

#5.12 主体による欲動に対する防衛は  
速やかに行われる。

#5.11 対象aの顕現は、  
「大他者の非一貫性 (=  $\mathcal{A}$ )」  
(= 「象徴界の穴」) を露呈させる。

#5.13 「葛藤」を解消する行為を  
行うものを  
「主体」と呼ぶ。

#5.14 葛藤の解消と、  
主体の行為と、  
対象aの顕現に対する防衛とは、  
等価である。

\*K (結節点1)